現代語訳 論語と算盤

渋沢栄一 守屋 淳 訳

CHIKUMA SHINSHO

—われわれ日本人が『渋沢栄一』という原点に帰ることは、今、大きな意味がある。この百年間、日本は少なくとも実業という面において世界に恥じない実績を上げ続けてきた。その基盤となった思想を知るということは、先の見えない時代に確かな指針を与えてくれるはずだからだ。—

ちくま新書
827

9784480065353
1920212008207
ISBN978-4-480-06535-3
C0212 ¥820E
定価(本体価格820円+税)

渋沢栄一（しぶさわえいいち）
1840（天保11）～1931（昭和6）年。実業家。約470社もの企業の創立・発展に貢献。また経済団体を組織し、商業学校を創設するなど実業界の社会的向上に努めた。他の著書に『論語講義』などがある。

守屋 淳（もりや・あつし）
1965年東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。大手書店勤務後、中国古典の研究に携わる。雑誌連載、講演などを数多く行う。主な著書に『最強の孫子』『心をほぐす老子・荘子の教え』（共に日本実業出版社）、『孫子・戦略・クラウゼヴィッツ』（プレジデント社）、『論語』に帰ろう』（学研新書）などがある。

第1章 処世と信条

†『論語』とソロバンは、はなはだ遠くて近いもの

弟子たちが孔子[1]のことについて書いた『論語』という書物がある。ここには今、われわれが道徳の手本とすべきもっとも重要な教えが載っている。

たいていの人は、『論語』くらい読んだことがあるだろう。わたしはこれに、ソロバンというとても不釣り合いで、かけ離れたものをかけ合わせて、いつもこう説いている。

『論語』には、おのれを修めて、人と交わるための日常の教えが説いてある。『論語』はもっとも欠点の少ない教訓であるが、この『論語』で商売はできないか、と考えた。そしてわたしは、『論語』の教訓に従って商売し、経済活動をしていくことができると思い至ったのである。

「ソロバンは『論語』によってできている。『論語』もまた、ソロバンの働きによって、本当の経済活動と結びついてくる。だからこそ『論語』とソロバンは、とてもかけ離れているように見えて、実はとても近いものでもある」

第4章 仁義と富貴

†本当に正しく経済活動を行う方法

実業というものを、どのように考えればよいのだろう。もちろんそれは、世の中の商売や工場生産といった活動が、利潤を上げていくことに外ならない。もし商工業が、物質的な豊かさをもたらさなかったら、商工業など無意味になってしまう。

しかし、だからといって、経済活動を行うにあたって、もしみなが、

「自分の利益さえ上がれば、他はどうなってもいいや」

と考えていたらどうなるだろう。むずかしいことをいうようだが、もしそんな事態になれば、孟子という思想家のいうように、

「利益のことなど口にする必要はない。社会のためになる道徳こそ大事なのだ」

「上にいる人間も、下にいる人間もともに利益を追い求めれば、国は危うくなる」

「もし、みんなのためのことを考えずに、自分一人の利益ばかり考えれば、人から欲しいものを奪い取らないと満足できなくなる」

といった事態になるのである。だからこそ本当の経済活動は、社会のためになる道徳に基づかないと、決して長く続くものではないと考えている。

このようにいうと、とかく「利益を少なくして、欲望を去る」とか、「世の常に逆らう」といった考えに悪くすると走りがちだが、そうではないのだ。強い思いやりを持って、世の中の利益を考えることは、もちろんよいことだ。しかし同時に、自分の利益が欲しいという気持ちで働くのも、世間一般の当たり前の姿である。そのなかで、社会のためになる道徳を持たないと、世の中の仕事というのは、少しずつ衰えてしまう、ということなのだ。

～ 中略 ～

逆に、頭でっかちの理論を振りかざし、利益を掴むことを否定してかかったのだ。その結果、人々の元気がなくなり、国家も衰えて弱くなってしまった。ついにはモンゴルに攻め込まれてしまい、内部の混乱も続いて、とうとう元というモンゴル人の王朝をたてられ統一される羽目となった。宋時代末期におきた、これは悲劇に外ならない。

このように現実に立脚しない道徳は、国の元気を失わせ、モノの生産力を低くし、最後には国を滅亡させてしまう。だから、社会のためになる道徳といっても、一歩間違えれば国を滅ぼすもとになることを、頭に入れておかなければならない。

利益を得ようとすることと、社会正義のための道徳にのっとるということは、両者バランスよく並び立ってこそ、初めて国家も健全に成長するようになる。個人もちょうどよい塩梅で、富を築いていくのである。

「経済活動」と「富と地位」を、孔子はどう考えていたか

今まで孔子の教えを信ずる学者が、彼の教えを誤解していたなかでももっとも甚だしいものは、「富と地位」と「経済活動」の二つの考え方であろう。彼らが『論語』を解釈したところによると、「道徳と思いやりの政治を掲げて、世の中を治める」ことと、「経済活動によって富と地位を得る」こととは、火のついた炭と氷のように、一緒にはしておけないものとされている。

では孔子は本当に、

「富と地位を手にした者は、道徳によって世の中に貢献する考えなどない。だから、高い道徳を持った人物になりたければ、金儲けなどしようと思ってはならない」

といった内容を説いていたのだろうか。わたしが二十篇ある『論語』をくまなく探してみても、そんな意味の言葉は一つも発見できなかった。いや、むしろ孔子は経済活動の道について語っているくらいだ。しかしその説き方が、孔子が他でもよくやっているように、半面的なものであったため、学者たちはその全体像を理解することができず、ついには間違った解釈を世の中に伝えるようになってしまったのである。

「正当な方法で富が得られないのであれば、いつまでも富に恋々としていることはない。気に入らないことをして富を手にするより、むしろ貧賤に甘んじてまっとうな生き方をした方がよい」

「道理をともなった富や地位でないのなら、まだ貧賤でいる方がましだ。しかし、もし正しい道理を踏んで富や地位を手にしたのなら、何の問題もない」

「まっとうな生き方によって得られるならば、どんな賤しい仕事についても金儲けをせよ。しかし、まっとうではない手段をとるくらいなら、むしろ貧賤でいなさい」

ということになる。やはりこの言葉の一方の側面には、「正しい方法」ということが潜んでいることを、忘れてはならない。

よく集めて、よく使おう

お金は、現実に世界で通用する貨幣の通称だ。そしてそれは、いろいろな物品の代表者でもある。

また、お金は社会の力をあらわすための大切な道具でもある。お金を大切にするのはもちろん正しいことだが、必要な場合にうまく使っていくのも、それに劣らずよいことなのだ。よく集めて、よく使い、社会を活発にして、経済活動の成長をうながすことを、心ある人はぜひとも心がけて欲しい。お金の本質を本当に知っている人なら、よく集める一方で、よく使っていくべきなのだ。よく使うとは、正しく支出することであって、よい事柄に使っていくことを意味する。よい医者が大手術で使い、患者の一命を救った「メス」も、狂人に持たせてしまえば、人を傷つける道具になる。これと同じで、われわれはお金を大切にして、よい事柄に使っていくことを忘れてはならない。

お金とは大切にすべきものであり、同時に軽蔑すべきものでもある。ではどうすれば大切にすべきものとなるのか。それを決めるのはすべて所有者の人格によるのである。ところが世間は、大切にするという意味を間違って解釈し、ひたすらケチに徹してしまう人がいる。これは本当に注意すべきことだ。

お金に対して、無駄に使うのは戒めなければならない。しかし同時に、ケチになることも注意しなければならない。よく集めることを知って、よく使うことを知らないと、最後には守銭奴になってしまう。いまの若い人たちは、金づかいの荒い人間にならないよう努力するのと同時に、守銭奴にならないよう注意すべきなのである。